## 終戦直后に於ける在留邦人の苦境と内地に向う脱出

終戦に方り、在鮮日本人の中、或る者は、前途に不安を感じ、何は兎もあれ、一日も早く内地に帰還せんことを希い、或る者は、暫らく事態を静観し、且つ、成るべく在留することを期待した。

内地に引揚を希望したものは、満洲又は北鮮からの少くなからざる難民を含み、八月末頃迄に、約三万人内外が、南鮮沿岸の各地から機帆船その他の小船によつて日本に向つたが、此の間、暴風・機雷・又は暴民等の為相当な犠牲者を生ずるに至つた。

八月末頃に於ける満洲よりの避難民は、釜山約三千名、京城以南各駅約六千、平壌約六万内外に達し、平壌附近の者は、「ソ」連に抑えられ、且つ、鉄道輸送も停止せられた。

以上のような状態であつたが、一方、日本内地に於ても、帰鮮を希望する鮮人が少なくなかつたので、日本政府は、之等の事情に鑑み、八月二十七日、電第五八号を以て、連合国最高司令官に対し、





国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

目下、下関（本州）附近には、帰鮮を希望する鮮人旅客殺到し居り、他方、釜山（朝鮮）附近には、老幼婦女子を含む日本人多数集結し居り、且つ、両地共、食糧事情逼迫し居る他、治安も危惧せらるるに至りたるに付、右両者を相互に輸送するため、目下休止中の内鮮間鉄道運絡船航路（仙崎及博多と釜山の間を運航す）は、之を再開することは非必要と認めらるるを以て、之が許可を得度、右鉄道運絡船二隻（興安丸七一〇〇屯及徳寿丸五五〇〇屯）は之を非武装とし

「「「「云々」」」」

と要請した。

右に対し、連合国司令部に於ても、十分なる理解を示し、二十八日、連合国最高司令官より、右承認の旨回答があつたので、先づ興安丸が八月五十一日釜山に赴き、軍人其他約二五〇〇名を乗せて、九月五日内地仙崎港に帰還したが、之れ、我し正式に引揚船として動いた最初の船であつた。



0091

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp